

京都大学大学院 学生員 ○守津真麻

京都大学大学院 正会員 田中尚人

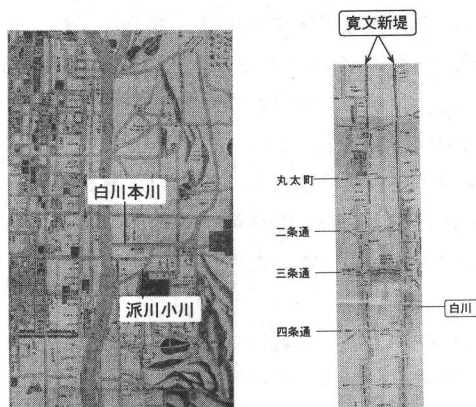
京都大学大学院 正会員 川崎雅史

1. 研究の背景と目的

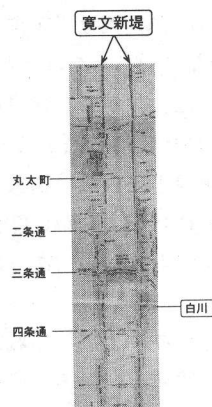
本研究の目的は、祇園白川地区の都市形成に当地区に直接流れ込む白川ばかりでなく、その白川を介して近代に建設された琵琶湖疏水も大きな役割を果たしてきたことを証明することである。明治期に建設された琵琶湖疏水は、舟運、発電、灌漑等の多目的な開発であったが、当地区においては白川の流量を安定させる等、主に治水面の機能を発揮した。こうして実現された白川の水位安定が当地区の京都らしい景観の継承を可能とし、インフラストラクチャーとしての水辺が都市の骨格として機能していることを示した。

2. 近世以前の祇園白川地区の都市形成と白川

本章では、近世までの白川の流路変遷を整理し、主に白川本川と派川（小川）との関係、及び両者と都市形成との関係に焦点を当て考察し、祇園白川地区の都市形成要因を整理した。



＜図-1＞旧白川



＜図-2＞寛文の新堤



＜図-3＞祇園新地における水利用

(1) 白川派川と本川

昔の白川本川は三条通りの北方を東西に流れ、鴨川に流入していた＜図-1＞。そして白川派川である小川が現在の平安神宮の大鳥居の辺から南西に向かい、知恩院門前町より鴨川に流れていた。

しかし、近世になると本川だった白川が断絶し、派川だった小川が新しい白川として本川化した。この原因は豊臣秀吉の頃、三条大橋が架け替えられた際に地形が変化し、洪水により流路が変わったと言われている。三条通北を流れていた白川本川は排水路となってしまった。

(2) 寛文の築堤と祇園白川地区

江戸時代に入ると、寛文年間（1661～1672）に鴨川の兩岸に上賀茂から五条に至るまでの新しい堤が築かれた＜図-2＞。築堤されることにより河原と市街地がはっきりと区分され、川幅がほぼ一定となったために、洪水の危険は少なくなった。この寛文新堤の特長には、鴨川の右岸だけでなく左岸にも設置されたことが挙げられ、この結果洛中だけでなく鴨川の東、洛外の都市的な発展が進んだ。祇園白川地区も例外ではなく、1670年（寛文10）には祇園外六町、1713年（正徳3）には祇園内六町が開かれ、外六町と内六町をあわせて祇園新地と呼び、大いに繁栄した。

祇園新地では、＜図-3＞のように、編み目のように水路網が張り巡らされ、白川から引き入れた水をできるだけ長く都市内に滞留させるシステムがつけられていたと考えられ、白川の水に依存した生活や景観が形成された。

3. 琵琶湖疏水開削と祇園白川地区

本章では、祇園白川地区に近代に入って挿入された人工運河琵琶湖疏水と白川との関係を詳細に調査し、次に琵琶湖疏水が当地区にどのような影響を与えたのかを明らかにする。

(1) 第一琵琶湖疏水の完成と白川の治水

1890年（明治23）に田邊朔郎の設計により滋賀県琵琶湖より京都府への通水が実現した琵琶湖疏水が完成した。祇園白川地区に琵琶湖疏水が挿入されたことにより、白川は南禅寺舟溜でいったん鴨東運河と合流し、500m西の慶流橋付近で分流、祇園白川地区を流れた後、四条通北で鴨川運河と合流した＜図-4＞。琵琶湖疏水は

他の地域でも河川と交差することはあっても、合流することはなかった。この理由として、合流地点である南禅寺舟溜が大量の砂を堆積させる沈砂ダムとしての機能を期待されたことと、堰を用いて分流することで白川下流の流量コントロールを可能にしたことが考えられる。

琵琶湖疏水の完成後、白川の流量がコントロールされ、古来からの祇園白川地区における白川の水に依存した生活様式や景観はそのまま保持されることとなった。

(2) 第二琵琶湖疏水建設と増水問題

明治後期から大正にかけての京都市の急速な都市化に伴い、いわゆる京都市の「三大事業」の先駆けとして、主に発電と水道源の確保に重点をおいた第二疏水建設の構想がうまれた。

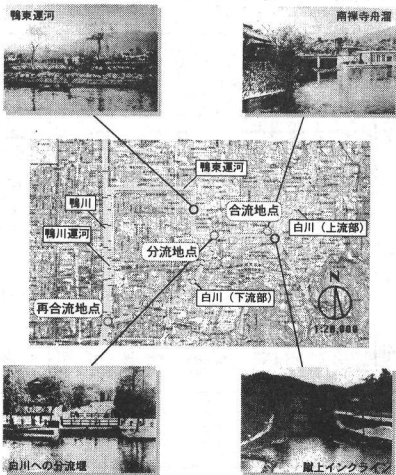
第二疏水建設に伴う増加流量により、蹴上以西の琵琶湖疏水流域では増加する水量の対処方法が問題になった。

当初は鴨川に放流される予定だったが、鴨川洪水に対する懸念がなされたため回避された。その次に考えられたのが白川を経由し、大和大路四条付近から管渠にして五条通北で鴨川運河に合流させるものであったが、増加流量による白川の洪水の危険性や、白川のせせらぎによってつくられた祇園白川地区の景観を損なうことが考慮されたためにこの案も回避された。

最終的に、鴨川・鴨東両運河の拡幅と夷川舟溜と鴨川の区間に白川放水路が建設され、第二琵琶湖疏水建設後も白川の流量は琵琶湖疏水により完全にコントロールされることとなった。

4. 昭和10年「鴨川大洪水」と白川・琵琶湖疏水

本章では、1935年（昭和10）に起きた「鴨川大洪水」とその後の復興事業における白川・琵琶湖疏水の変化を明らかにすることにより、第3章の実証を行う。



＜図-4＞琵琶湖疏水建設による白川の流路変更

(1) 被害状況

1935年（昭和10）6月に鴨川大洪水が起き、京都市内を流れる高野川、岩倉川、堀川、白川、天神川が氾濫した。この年の8月にも再び洪水が起き、相当な被害が出た。

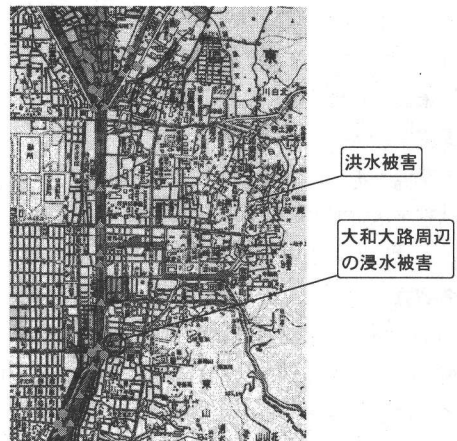
＜図-5＞はこのときの被害状況図であるが、この図より、南禅寺以北の白川流域では、堤防の決壊や、道路、橋梁の被害が起きているのに対し、琵琶湖疏水から分流した白川下流域の祇園白川地区では被害は比較的小さかったことが分かり、琵琶湖疏水による白川の流量コントロールが上手く機能していたことが実証されている。

しかし、大和大路四条周辺では鴨川からの背水が鴨川運河に浸入し、白川を遡上したために浸水被害がおきた。これは白川と鴨川運河との接続方法に問題があったと考えられる。

(2) 鴨川大洪水後の白川・琵琶湖疏水の変化

鴨川大洪水後、鴨川改修、京阪地下化、鴨川運河の暗渠化計画が生まれた。

1988年（昭和63）の鴨川運河暗渠化後、白川は暗渠化された鴨川運河のさらに下を流れ、鴨川に直接放流されることとなり、前述の問題は解決された。



＜図-5＞鴨川大洪水・被害状況図

5. 結論

インフラストラクチャーである琵琶湖疏水は祇園白川地区を直接流れてはいないが、白川の流量をコントロールすることで、古来から白川の水に依存してきた当地区の治水、利水、親水に貢献し、景観を含む都市形成に寄与してきたといえる。

＜主要参考文献＞

京都市編：京都の歴史、1969～1975

京都市役所：京都市水害誌、1936.3.30

京都新聞社編：琵琶湖疏水の100年＜叙述編＞、京都市水道局、1990.4.9